

昭和22年と言えば、戦後まもなくで、食住に事欠き、熊谷総長の、日本は10年たったら必ず復興する、第一次大戦後のドイツがそうだったからという言葉も眉唾物で、進駐軍のいう、日本四等国論が、むしろ現実に似つかわしく思えた頃だった。

かの有名な石巻のNK君あたりが中心となり、数名で駄弁を弄しているうち、夢は次第にふくらみ、全国的な組織結成へ進もうということになった。(中略)

ひところ、順風逆風という言い回しがあったが、昭和22年、片山社会党内閣の誕生はどんな風の吹きまわしだったのだろう。

気候のいいころだった。全国遊説の途次、首相以下の各閣僚及び党幹部が大挙して来仙し、演説会をひらくことを聞きつけたKK君(仙台東部で開業中)が東七番丁の菊池養之輔代議士と面識があるから、その紹介で首相への直接陳情をセットして貰い、KK君と彼某君と2人でゆくことになった。当日会場である五橋小学校の焼残り校舎で(学制改革前で、小学校だった筈)KK君と待合わせたが、到頭KK君はあられわれず、その後も欠席の弁解はなかった。約束の時間が来たので、ままよ、とばかり指定された部屋で只一人待っている

ると、菊池代議士を1人だけ従えて片山首相の登場となりました。膝を折りたたんでも入らぬ、小学校低学年用の机と椅子、僅か数十種の距離で対坐し、菊養さんが立会人か介添役或はお目附の役で控えておる、もともとKK君が主役で彼は陪席の積りだったのが一転、主役を演じなければならなくなった。孤立無援という言葉が、一瞬頭の隅をよぎった。医学教育の過去現在および望ましい未来像について、彼なりに必死の思いで熱弁を振るう事小一時間。(中略)とまれ一学生の分際で、時の首相に独演会の如き陳情を、さして小一時間できたことは、その内容は一として具体化されず、失敗だったとしても、時代もあったろうがよくできたものと、表題の連想で想起するとき、背に非生理学的な発汗を覚えるのである。(けせん医報1991年4月号 随想「盲、蛇におじず」より転載)

この随想の筆者、文中の彼某君とは私の亡父、滝田満である。父は大正14年生まれなのでこの陳情のときは21、2歳ということになる。戦時中、軍医を急拵えするため、帝国大学に医学専門部が作られた。父も18歳で東北帝大附属医専に入り、自分の人生は20歳で終わりだと思っていたというのを聞いたことがある。それが敗戦により一転し、目指したものは帝大附属医専を存続し仙台に第2の医学部を作ることであった。畏友・故菊田昇先生(文中の石巻のNK君)に引っ張られたとはいえ、元来引っ込み思案の父にしては大胆なことをしたものだと思う。今を予見する能力が彼にあったとはいわない。その構想はあっけなく闇に葬られ、その後60年以上顧みる者はいなかった。

3.11津波の前年であったろうか。仙台に医学部新設という構想を突如として耳にしたのは。実現可能なのか?ハードルはかなり高い気がした。だが私は亡き父の思いが現世に蘇った気がして、郷愁というべきか、正直な話、嬉しかった。

そしてあの日がやってきた。私自身、妻とともに津波にのみこまれた。海岸線から100メートル足らずにある自分の医院であった。祖父、父、私と三代にわたり同じ地で開業していた。三陸は津波の常襲地であるが、開業後にまともに津波被害を受けたのは私が初めてである。逃げ遅れて医院2階に避難したが、瞬く間に天井まで海水が満ちた。一時は死を覚悟した。平成20年のくも膜下出血の時もそうだったが、人間死ぬときはあっけなく死ぬものだと思った。愛犬は溺死した。私は意識消失して呼吸も止まっていたのだろう。覚醒したときには引き潮になっていた。瓦礫をかき分け一階に降りた。海水を誤飲して動けなくなった妻を背負い、よろよろと安全地帯まで逃げ込んだ。

気仙（けせん）とは岩手県の東南端に位置する2市1町（大船渡市、陸前高田市、住田町）の総称（旧郡名）である。今回の3.11大津波では死者行方不明者合わせて2千人を数

え、岩手県最大の被害を受けた。気仙医師会では会長、副会長、理事の3名が帰らぬ人となった。また開業医30軒のうち5軒が廃業、被災したのは17軒に及んだ。従来から枯渇しつつある医療資源が決定的に少なくなった。気仙は三陸沿岸の中で仙台からも盛岡からも最も遠い地域である。もともと医者は少なく、さほど医師会活動に熱心ではない普通の開業医でも、学校医、保健医、介護保険審査員は掛け持ちである。一人何役もこなして赤ん坊から老人まですべての地域住民を診なければならない。

大津波から一年たち、平成24年年4月に推されて気仙医師会長となった。アパートで一人暮らし、診療所はプレハブという医師会長は珍しいだろう。「復興元年」と県知事が言う平成24年は全国からいろいろな学会、大学、財団などが当地にも入っている。会長であるために種々の協議会の議長に祭り上げられるので必然的に勉強する機会も多い。

現在の気仙は若い人が仕事を求めて内陸部へ転居するための人口流出と高齢化比率が高まっている。このため3.11以前から厚労省が目指している在宅医療へのシフトを必然的に受け入れていかざるを得ない。また気仙2市1町は津波前からの国の構想である「環境未来都市」の一つに選定された。目指すのはコンパクトシティであり、図らずも介護分野が主導で構想された厚労省の「地域包括ケア」と連動することになる。

「地域包括ケア」とは4～5千人程度の人口を有し中学校の学区程度の広さを想定、その域内で医療・介護をまかない、住民は24時間安心して生活できるのを目指す構想である。これはあくまで都市部を想定したシステムであり地方に導入するのは実際は難しい。

しかし、このシステムの核心は介護ではない。核となるのは実は医師の存在である。都市部なら、想定エリア内には複数の医師がいるであろう。しかし地方では居てもせいぜい1人であろう。3.11以前でさえ気仙の医師は前述のように一人何役もこなすオーバーワークであった。これに地域包括ケアが入ればどうなるのだろう。間違いなく過労死が待

っている。地域医療崩壊の序曲になるのでは？と危惧する。

思い出すのは平成20年の正月である。前年県病の循環器内科の人員整理が唐突に行われた。そのあおりを食らい当院の外来は忙しくなった。そういう時に限って、年末にかけて介護施設から、「家族の希望で在宅にするので今後診てほしい」という連絡がこれも唐突に入る。応召義務があるのでお引き受けする。年が明けてから三が日は連日これらの患者さんからお呼びがかかった。ちょうど電子カルテの導入も重なって疲れきっていた。1月9日、電子カルテが始動した翌日であった。私はクモ膜下出血をきたし路上で倒れた。

この年の私は2回の開頭手術を経て9月に本格的に復帰した。その間は医院を完全に閉めるわけにもいかず、週2回循環器内科の医局から大学院生に代診に来てもらった。人件費はかかったが非常に助かった。患者さんは喜び私自身もカルテを通して若い先生に自分の診療内容をチェックしてもらい新鮮であった。

かつては三陸沿岸にも循環器内科医は少なからず存在した。例の名義貸し問題やオンブズマンによる「裏金」の摘発などで、東北大派遣の循環器内科医は岩手県の三陸沿岸からは居なくなってしまった。ここで提案がある。公的病院への派遣が成り立たないのであれば、「地域への派遣」があっても良いのではないか？地域に根ざした開業医と協働もしくは分担して地域医療に当たれないのだろうか？1週～1か月単位でも構わない。地域包括ケアが実現した時、肝心要の医療を担う医師がたったの一人では話にならない。

東北大学は3.11の直後マイクロバスに各科の医師を乗せて宮城県の被災地を巡回した事実は承知している。尊い行為だと思う。しかし岩手県まで手が回らないのであろう。岩手医大も同様で、私の地域に来てくれて、4月4日に私が避難所で診療再開してからは私のサポート役に徹してくれ、6月いっぱいいてくれたのは自治医大のチームであった。

復興の過程で東北大学が世に示したのは「メディカルメガバンク」という構想である。内容はあまりに高尚すぎて私にはよく理解できない。しかし二律背反となって無理が生じているのは直感できる。

私も卒業生なので母校には世界で戦ってほしい、一方で今の被災地の開業医という立場では地域医療にもっと目を向けてほしい。

無理ならば、いっそ医学部新設に賛成してはどうか？被災県の3医学部がこぞって反対しているのは承知である。全国的には医学部の定員は充足し10年後には医師過剰になることも承知である。初期研修後の「定着率」では東北大学は高いので、単に定員を増やせばよいという考えがあるもの承知である。文章に書けない諸々の問題があるのも承知している。

だが医学部にはそれぞれ思想的バックボーンがあるのではないか。東北大学は世界を相手にしつつ地域医療もやらねばならない。しかし「二兎を追うものは一兎をも得ず」とはならないだろうか？

新設医学部の教官をつくれれば、中堅以上の医師は地域医療から引き離されてしまう和人

は言う。しかし例え西日本から教官や学生を奪ってでも地域医療への貢献を文化にもった、「もう一つの医学部」を仙台に作るべきではないだろうか？

東北市長会など行政側は仙台への医学部新設を強く望んでいる。一方医師会は被災3医学部と同一歩調をとっている。斯くいう私も岩手県医師会の理事会の席上、意見陳述はしたが大勢には抗しきれなかった。

大津波にのまれる前、医学部新設問題は亡き父への郷愁に留まっていた。3.11からの復興の道のりのなかで、その問題は私の中で大きくなっていった。

海からたった100メートル、更地になった私の医院の跡。風に吹かれながら、わが三代の来し方行く末を考える。当時は一顧だにされず闇に埋もれた歴史を、いま埃をはたいて取り出してみるのも意味があるだろう。